2013/03/02

平塚柔道物語５６

生徒のお母さんの手紙

平塚柔道協会　会長　奥山晴治

今年３月卒業の松澤ヒデキ君（浜岳中３年）のお母さんから、長い手紙を頂いた。その中で私が知らなかった真田教師の指導の一面を紹介したい。

まず、県大会の数日前に息子が報告。「今日、真田先生がこんな話をしてくれたんだ。知っての通り、相模中や相原中は、小学生の頃に全国大会で活躍した選手が何人もいる。体格の差もあるし、普通に考えたら、正直に言って勝てない。最後まであきらめない奴が奇跡を起こすんだ。いま、自分ができることに集中しろ！　ゴールデンスコアに入る。どちらも苦しい。そのとき、思い切って技に入るのは怖いな。技を掛けたために返されて一本負けすることだってある。そんな時、必要なのは、勇気だ。自分を信じて思いっ切り技を掛ける。その勇気を持てるようにするために、俺たちは人の何倍もの苦しい練習をしているんだろ？　どんなに強い相手でも、どんなに苦しいときでも（俺はお前よりずっと苦しい練習をしてきたんだ！！）という思いが、お前たちの背中を押してくれる。そうやって、これまで何人もの先輩たちが奇跡を起こしてきたんじゃないのか？」私にそれを伝える息子の目には、希望の光が宿っているように見えた。心から尊敬し、信頼できる先生の言葉は、大きな、大きな力がある。また、３年生の部員たちに、真田先生が勉強の大切さについて、話して下さったことがあるという。「いいか、お前たち、どんなに柔道が強くなったとしても、オリンピック選手になったり、実業団で活躍できたとしても、選手でいられるのは、せいぜい３０歳までだ。残りの５０年の人生をどう生きていくのかを今からしっかりと考える必要があるぞ。人生の節目には、必ずといってよいほど試験がついてくる。入試もそうだし、就職試験もそう。資格を取るための試験もあれば、昇格するための試験もある。勉強から逃げるわけにはいかないんだ。今のうちに、ちゃんと勉強をしておけ。昔は強かったんだぞ、なんて中身の空っぽな奴が言ったとしても、誰がついてくると思うか？　勉強をする習慣をしっかりつけておくんだ。」と言われたという。そして、真田先生は、単に柔道が強い子供を育てたいわけじゃない。心の真ん中にしっかりと軸を持ち、それがその子の一生の軸となり、自分の頭で考え、自分の力でちゃんと生きていけるような人間教育を実践されているのだと気がついた。大切な試合の直前でも、誰かが問題を起こすと、連帯責任として、全員で何日でもミーティングをしたり、掃除をすることがあった。見ている親たちの方が、「先生は試合に勝てなくとも平気なんだろうか？」とハラハラするほど、時間をかけて反省させた。提出物や私生活の乱れについても、とても厳しく指導されたが、どれも社会に出れば常識となることだった。また、身体の成長が遅い子は、中学の大会では思うような結果が残せないことも、先生は充分に理解し、その子の将来のために、目先の点を取る柔道ではなく、地道に技を磨く指導を続けられた。強い子だけが特別ではなく、どんな時でも浜岳柔道部は、全員で浜岳柔道部だった。「いつか、お前たちは柔道着に日の丸を付けて世界の頂点に立つ日が来るんだろう。俺はそれを信じているぞ！」と何度も何度も話し続けて下さる真田先生と過ごした３年間を子供たちは生涯忘れることが出来ないと思う。浜岳中学柔道部と真田先生に息子が出会えたことに、私は心から感謝したい。

一つ努力という裏付け、二つ学ぶことへの姿勢、三つ人間としてあり方。私はこの手紙を通して真田先生の絶妙な人間教育の新たな視点を確認したのである。

指導する真田教師